

事業名：東日本大震災で消滅した松島湾の藻場再生活動
 助成内容：2015～2017年度 復興支援助成
 助成金額(千円)：('15)2,078 ('16)2,518 ('17)2,185

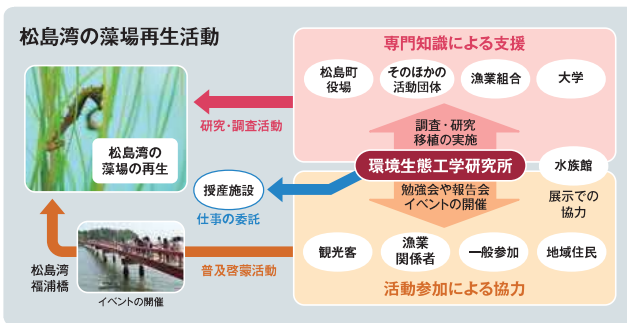
特定非営利活動法人 環境生態工学研究所
 〒984-0051 宮城県仙台市若林区新寺 1-5-26-104
 E-mail：e-tec@world.ocn.ne.jp
 http://www.e-tec.server-shared.com/



多様な関係者と連携し、松島のアマモ再生



高校生たちの環境教育も兼ね、浮島に種をつけたアマモを入れて沈め熟成と播種をおこなう



6 主任研究員 大谷考一さん 会員 齋藤実美さん 理事 佐々木久雄さん

1 活動について 調査研究を進め 震災前の藻場を復元

環境生態工学研究所は、宮城県仙台市を拠点に、学術調査や技術開発指導、環境教育などを通して地域の環境保全をしてきました。

その活動の1つに、日本三景にも選ばれた松島湾における藻場の調査があります。長年、環境悪化で減少したアマモの再生に取り組んできましたが、2011年に東日本大震災が発生して大きな被害を受けました。地域の研究機関も被災した中、同年5月に船を出して湾内を調査した結果、震災前に200万㎡以上あった藻場の99%が失われたとわかりました。

そこで今回のプロジェクトでは、松島湾のアマモの生育環境を明らかにして藻場を再生し、地域の水産業や観光業の活性化をめざしました。そのために松島湾の藻場の調査を4回、湾内の環境調査を4地点で15回おこなったほか、藻場造成地の検討と実施に向けたヒアリングやミーティング、アマモ移植手法開発のための実験や調査、そして藻場の重要性を周知するための勉強会と見学会を毎年1回開催しました。

活動のポイント 連携体制を築いて、 活動を進める

藻場を造成してアマモの植栽を試みましたが、なかなか良い結果が出ませんでした。そこで効果的な種まき手法の開発を地元の水族館に相談し、ともに活動しました。また、植栽の活動や経過を水族館の展示などで公開することで、漁協や役所などの信頼が得られ、地域の連携も深めることになりました。

2 助成金の使い方 水族館から漁協まで、地域の多様な力をつなぐ

本活動では、まず藻場生態系の調査をおこないました。東日本大震災の津波で大きな被害を受けた藻場の復元が、松島湾の生態系の正常化に大きな役割を果たすと考え、アマモの回復状況を継続的に調査しました。学術的知見やデータ分析については、大学や漁協などの協力を得て地域との連携も深めています。「たとえば、漁師にしたらアマモは船や養殖棚に絡まる厄介者です。しかし、生態系における藻場の重要性を何度も足を運んで説明し、次第に理解を得られるようになったんです」と佐々木さん。その結果、施設や水槽を借りられる

ようになり、活動の一助になりました。また、研究によってアマモの移植手法も開発できました。「最初は一般的な方法を試していたのですが、うまくいかない。研究を進める中で、松島湾のアマモの生育環境は非常に特殊だとわかったんです」と大谷さん。「そこで、独自の移植手法の開発や湾の底質改善をはじめたんです。研究には地元の水族館も協力してくれました。震災後にリニューアルオープンし、松島湾のアマモの展示水槽やプロジェクトの紹介パネルを設置したこともあり一致団結。ともに試行錯誤を重ねた末の成果です。

3 助成事業を終えて 地域の課題を、観光地でアピール

アマモの移植手法や、湾の底質改良の必要性などが明らかになったこともあり、「松島湾 うみっこ たづっこプロジェクト」を企画し、新たに3年間の助成を申請しました。「たづっこ」とはタヌオトシゴのこと。松島湾の藻場にたくさんいて土産物にするほどだったのに、震災後に姿を消してしまった。そこでプロジェクトの目標を「たづっこがすむ藻場の再生」とし、回復の目標としました」と大谷さん。

活動は、観光地である松島の利点をいかして工夫しました。「人気の観光スポット、福浦橋に砂団子を用意して観光客に投げ入れられてもらう湾の底質改善イベントを企画したんです。標的に砂団子を当てる記念品も出ます」と齋藤さん。松島町はユネスコの「世界でもっとも美しい湾クラブ」に参加しているため、イベントの共催にも喜んで協力してくれました。ま

た、砂団子と記念品は地元の授産施設に作ってもらっています。障がいをもつ方の自立支援にも貢献できるアイデアで、活動が広がっています。

震災の大きな被害を経験しながらも、豊かな生態系を取り戻そうと熱い思いをもって活動をつづける環境生態工学研究所。地道な活動の中でも理解者や関係者を増やし、地域一体となって取り組む姿が印象的でした。

藻場の再生と共に、そこに関わる人の輪も広がっている点が素晴らしいです。アマモを知ってもらい、アマモを助ける人を増やしていく。地元の方から観光客まで、誰でもアマモとつながれる活動を今後も期待しています！



水族館や漁師さんも参加して、子どもたちと移植苗づくり



砂団子は親しみやすい動物のかたちに



福浦橋から砂団子を投げ入れることで、観光客も藻場の再生に参加できる



地球環境基金 角田洋子

基金より
ひとこと